
ずっと一緒だよ

新條大輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと一緒だよ

【Nコード】

N4555W

【作者名】

新條大輝

【あらすじ】

日本の女子高校生、すみざわみしお角沢深汐は緋色の飛竜レフォーレーゼと出会った。ヴァンプリマのメイエットとともに、彼女はレフォーレーゼを守るために、その背に乗って治安部隊から逃げ出す。レフォーレーゼとメイエットから確かな『友情』を感じた深汐は、大切なものを守るために立ち向かうことを決意する。

青く澄み渡った空に、巨大な赤が羽ばたいていた。それは緋色の翼で周囲を飛び交う鋼色の戦闘機を撃ち払い、全身に紅蓮の炎をまとっている。

雪のように降り注ぐ火の粉は、瞬く間に町中を真っ赤に彩っていく。火災から逃げ惑う人々の悲鳴が、町中に轟いていた。また、青い空には黒煙が立ち込めている。

「グガアアアアアアッ！」

その咆哮は人間の泣き言をかき消し、大気を振動させ、街灯や建物のガラスを打ち砕いていく。憤怒を感じさせるそのおたけびは、地上の町に恐怖を伝播させた。

「な、なんなの……？」

緋色の飛竜と鋼色の戦闘機が上空で交戦する様子を、真下から見守っていた女子高生がいる。

角沢深汐すみさわみしおは高校の制服に袖を通して、鞆と竹刀を片手に、これから剣道部の朝練習に向かう途中だった。その長い黒髪は、激しい熱風によってなびいている。肌に触れるその熱さと鼻を通る焦げくささに、深汐はこの場にいることがどれだけ危険かを察した。

「火災じゃない。な、なんで……早く、消防車とか呼んだほうがいいのよ」

携帯電話を取り出そうとした深汐だが、アスファルトの上に飛び散るガラスの破片を目の当たりにしてハツとなる。今は身の安全が大事と、鞆で頭を守りながら近くの高校へと走ってゆく。

「グオアアアアアアッ！」

相対する戦闘機にミサイルを撃ち込まれ、緋色の飛竜は苦しみに咆哮する。その翼膜よくまくには風穴が開き、緋色の飛竜は力強く羽ばたけことができず、徐々に高度を落としていった。

「も、もしかして……墜落つらくってことはないよね？」

深汐は高校の門の間に立ち、もう一度空をあおぎ見た。黒煙が立ち込める空を飛翔する飛竜の容姿は、額に太く長い黒の一本角があり、艶のある緋色の鱗をまとっている。その首には錆色さびいろのたてがみがなびいており、飛竜の周囲が歪んで見えた。全身にまとう灼熱の炎によって起きた、塵気楼現象だ。

「もう、私に戦うつもりなどない！　どうか、止めてくれええええええっ！」

深汐は自分の耳を疑った。今まで、飛竜の声は動物的なものだったはず。なのに、今はその意味がはつきりと理解できたのだ。

「う、嘘……だよな？　げ、幻聴かな？」

両方の耳を深汐は人差し指でほじくっている。それをしながら、上空で抵抗する緋色の飛竜を見守っていた。

「が、頑張つて。ドラゴンさん」

耳から外した手を胸の前で重ね合わせて、深汐は飛竜の無事を祈っていた。

「え？」

無意識に行った自分の動作に、深汐は愕然がくぜんとする。

「な、なんでこんなことを……」

戸惑いながらも深汐は、緋色の飛竜が無事であることを切に願っていた。

「だ、れか……たすけて、たもれ」

そのつぶやきが耳に届いて、深汐はハツとなる。

町に火災をもたらした緋色の飛竜は、深汐の背後にある高校の校庭に墜落していた。

後ろにある校庭を振り返り、深汐は両手で口を押さえる。幸いにも、校庭に人はいなかった。朝練習をしていた運動部員はすでに校庭から避難し、校舎のほうに移動していたからだ。

「ぐうう。に、人間どもめ……こちらが悠長に飛んでおれば、すぐ

にちよっかいを出しおつて。私がいつたい、何をしたというのだ……？」

体育館は飛竜の尻尾がめり込んで半壊しており、その中から生徒が大勢飛び出していた。混乱しているため、転倒者が後を絶たない。学校の周りには緑色のフェンスは、飛竜が墜落した衝撃で折れ曲がっていた。一部はすでに、飛竜が放つ炎の熱によって融解ゆっかいしている。近くにある鉄棒とサッカーゴールも高熱によって溶けていた。ゴールネット、観戦用のベンチに野球のバット、放置されていた野球とサッカーのボールは、燃え尽きて灰になっている。

緋色の飛竜のいる校庭は、すでに溶岩地帯と化していた。赤く発光するそれは、灰色の煙を巻き上げている。

「それに、なんじゃ……あの鋼鉄の羽虫はあつ!? 人間はいつの間にも、気球や大砲に変わるものを……ぐっ」

「に、人間みたいにしやべつてる? う、うっそお」

深汐には、その飛竜が何を言っているのか理解できていた。しかし、校舎の周りにいる学生、集まってきた野次馬、警察官と自衛官は、飛竜の言葉などに耳を傾けていない。

学生に野次馬は携帯電話やデジカメを片手に、飛竜を撮影していた。警察官に自衛官は「危険だから下がれ」と叫んでいるが、誰も聞く耳を持ちはしない。報道カメラマンとレポーターの何組かは冷静に、混沌とする現場の状況を伝えているようだ。

「わわっ」

後ろから誰かに突き飛ばされ、深汐はよろけてしまう。剣道で鍛えた足腰でどうにか踏ん張り、深汐は人の波を避けるために、体育倉庫の裏側に身を潜めることにした。

「まったく、どうしてこんなに人が……」

サイレンの音がけたたましく鳴っている。パトカーだけではない。救急車に消防車も集まり、それらを押しよけるように戦車が学校を取り囲み、砲身を飛竜へと向けている。

散開していた戦闘機は新たに編隊を組んで空を飛び回り、地上の

飛竜の動向をうかがっているようだ。

「あーっ、冷たくて甘いものを口にしたいなあ」

「え？」

混沌としている中、緊張感のない声が聞こえて、深汐は緑色のフエンスの向こう側に目を凝らした。しかし、そこには人はいない。見えるのは路肩に駐車されている一台のバイクと、赤いランプを照らしている緊急車両に、砲身を校庭へと向けた戦車ぐらいだ。

「き、気のせいか」

深汐は体育倉庫から校庭に出て、眼前の光景を目の当たりにして足を止めた。

「わつと。ど、どうしよう……」

溶岩地帯と化した校庭は、人を誰ひとりとして寄せつけていないかと思いきや、飛竜の目と鼻の先に誰かが突っ立っている。深汐は驚きながらも、その人物を注視していた。

「あ、青くて長い髪……？」

深汐は邪魔になると思って、鞆を倉庫の脇に置いた。竹刀を片手に校庭の中心　飛竜と謎の人物のいるほうへと歩いていく。赤く発光する地面を避けて、スカートを翻しながらも飛び越えて、深汐は後ろから聞こえる制止を振り切って進んでいった。

「わわつと」

ついに深汐は、謎の人物と緋色の飛竜に直面する。

「あ、あなたは……？」

深汐の前に立つのは、雪のように肌が白いひとりの女性。話しかけた途端に、深汐はひんやりとした冷気を感じ取った。

「さ、さぶっ」

その女性がまとう冷気は急速に凍てついて、吹雪を舞い起こしていた。それは緋色の飛竜が放つ熱気を凌駕し、溶岩と化していた地面と湿度の高い大気を冷ましている。

「……………」

その女性が履く革靴の表面には、白い霜が付着していた。

女性の服装を下から示すと、丈のある濃い青のジーンズで、その長い脚を覆い隠している。上には黒い革製のジャケット、中には無地の白いシャツを着ていた。そのシャツは汗染みと黄ばみが目立っている。

左右の手首には腕時計をつけており、五本の指は黒い革製の手袋に包まれていた。その両手にはカードの束があり、器用にシャツフールを繰り返している。

「そ、それに……この、ドラゴンはなんなの？」

恐るおそる竹刀の先を飛竜の頭に向けながら、深汐は女性に詳細を訊ねた。

その女性はカードの束をジャケットの裏にしまつてから、両手でお腹をさすつている。半目で深汐を見つめているが、女性は答えるつもりはないらしい。その代わりに深汐の脇に鼻を近づけて、彼女の体臭を嗅いでいた。

「な、何してんのっ？」

深汐は驚いて飛びのき、今度は女性のほうに竹刀を向けた。

肩をすくめていた女性は、深汐を見つめながら「バナライイス？」と、意味不明なことをつぶやいている。

「小娘が、ふたりか……ふっ。そんなのに見取られて、暗がりになげというのか」

大きな溜息をついてから、緋色の飛竜は鼻呼吸でふたりに熱風を吹きつける。

「わつとと。ね、ねえ……しゃべってる？ あのドラゴン、しゃべってるよね？」

それを受けてよろめく深汐だったが、竹刀を地面に突き立てたおかげで転ばずに済んだ。一方、女性は微動だにせず目を細めているだけ。女性が何を考えているかは解らないままだ。

飛竜を前にしても、臆する様子がない深汐。青い長髪を熱風にな

びかせながら、女性は彼女のほうを振り返った。

その瞳はくすみのない青色で、髪と同様に妖しい艶やかさがある。頭には赤のカチューシャが飾られており、女性はそれを直しながら深汐にこう訊ねた。

「聞こえるのか？ バニラアイス　じゃなかった。君には」
「はっ？」

聞き覚えのある声に深汐は首を傾げていたが、声がして後ろの校門を振り返る。頭のカチューシャを整えながら、女性も校門のほうを見やった。拡声器による警告が、やかましく響いていたからだ。

『そのふたり！　一刻も早く、そこから立ち去るんだ。そのドラゴンへの攻撃が始まる前に、さあっ！』

自衛官による忠告。と同時に、撮影を止めない人々への威嚇射撃が行われた。それに驚いた学生と野次馬は、警察官と自衛官によって校庭から遠ざけられてる。

それとは別に、アサルトライフルと鉄の盾を構えた自衛官が列をなして校庭へと踏み込んできていた。溶岩地帯と化していた校庭はすでに冷えて黒ずんでおり、あちこちから白い蒸気が立ち込めている。武装した自衛隊が接近するのを目の当たりにしても、女性は肩をすくめるだけだった。

「あっしの名は、ティロード・メイエット」
「えっ？」

深汐の黒い瞳を見つめながら、女性はそう名乗った。

「バニラアイ　失礼。ところで、君の名前は？」

「あ、あたしっ？　角沢深汐ですけど……」

女性と飛竜を警戒しながら、深汐は自分の名を伝えた。

「ふむ。あっしのは、メイエットでいい」

メイエットと名乗った女性は、ジャケットの裏側から黒と銀が目立つ拳銃を取り出した。その銃口を上へと向けて、彼女はトリガーを引いて発砲する。それを目撃した自衛隊は足を止めていた。また観衆の視線は、メイエットに釘づけになっていた。

メイエットが持つ拳銃は、ナイトホークタロンのシルバーフレーム。タロンとは鉤爪かぎつめを意味する。

銃器のプロフェッショナルが集って設立した、ナイトホーク社が特注でこしらえたものだ。ベースとなるM1911をカスタムした、オートマチックピストルのシリーズで、ほぼ全ての部品が使用する人に合わせて作られたものである。

「黙っている、脂くさい青二才どもが。あつしは今、腹が減って気が立っているんだよ！」

メイエットの威嚇射撃に驚いて、耳を押さえながら尻もちをついている深汐。地面を転がる竹刀を震える手でつかんで、深汐は再びメイエットへとその先端を向けた。

一方、緋色の飛竜は大口を開けて、深汐を食べようとしている。「待て。バニラ　じゃなかった。その娘を、深汐は食うな」

後ろを振り向かず、メイエットは低い声で飛竜の行動をたしなめた。飛竜はその忠告を耳にするなり、鼻息でメイエットの青髪を揺らしている。その意味だけは正確に、飛竜に伝わったらしい。

「え、えっ？　わわわわわっ！」

頭によだれが一滴落ちた衝撃で、深汐は飛竜が自分を食べようとしていることに気がついた。メイエットの両足にすがりついて、おびえた眼差しを飛竜に向けている。

「あ、あたしは食べてもおいしくないからねっ!？」

「ふんっ。誰が、人間など……」

口を閉じて、飛竜は地面に顎をつけた。目を細めて、深汐という少女を品定めしているようだ。

「だったら、食べる素振りなんて見せるんじゃないわよ!」

「なんだと？　貴様のような小娘に、説教など……ん？　待て、お前は……私の言葉を理解しているのか？」

飛竜は大きく目を見開いて、深汐にそう質問した。

「え？　あ、うん。な、なんでだろうね……」

その瞬間、深汐は左胸を両手で押さえた。不自然な動悸がして、

深汐は呼吸を乱している。

「おい、無事か？」

メイエットは銃口を下げて、足下にいる深汐の頭を青いハンカチでふいている。飛竜のよだれで、そのハンカチはベトベトになってしまった。

「な、なんとか……だいじょうぶだよ」

「そうか。ならいいんだが……ったく、やかましいことこの上ないな」

拡声器での警告はまだ続いていた。それと、カメラのフラッシュと音も鳴り止むことはない。

前線にいる自衛隊は一列になり、射撃体勢を取っていた。どうやらふたり一組のようで、アサルトライフルを構えているのがひとり、分厚い鉄の盾を地面に突き立てているのがひとり。その盾は、飛竜の吐く火球を警戒しての防御策だろう。

「気楽な人間どもめ……痛みを知らないままで、他者の気持ちにも気づかぬ愚者で終わる器か？ カキ氷を一気食いして、頭を痛めていればいいのに」

そうつぶやくメイエットは濡れたハンカチを凍結させてから、それをジーンズのポケットに突っ込む。それから両腕につけている腕時計を見やり、時間を確かめているようだ。

「てか、ど、どうするの？ あなた、メイエット……だっけ？ あたしはメイエットを、ここから連れ出そうとしたんだけど。あ、あのさ……このドラゴンも、何とか助けられない？」

早鐘を打つ心臓を抑えようと、深呼吸を繰り返しながら訊ねる深汐。

飛竜は深汐の発言を耳にして、その紅の瞳を大きく見開いていた。深汐を見つめながら、飛竜はまばたきを繰り返している。

メイエットは拳銃が役に立たないと見たのか、安全装置をかけた後に、ジャケットの裏にそれをしまった。

「あるにはある。ただ、君が飛竜の背中に乗ることになるぞ？」

片方の口角を上げながら、メイエットは愉快そうに深汐にそう告げる。

「え、ええっ？」

その提案を受けて、深汐はめまいがした。

「あ、あたしは……お母さんのケーキ店の手伝いとかもあるんだよ！？　こ、こんなのと飛んでっいたら……わ、悪い意味で有名人になっちゃうじゃない！」

顔を赤くして絶叫する深汐の音量に、メイエットと飛竜は感嘆としていた。

「ああ、だから甘い匂いが……って、今はどうでもいいな。もうすでに、君もあつしも有名人じゃないのか？　向こうでカメラが回っていることだし、ね」

「あっ」

手で口元を押さえて、深汐はあたりを見回す。メイエットの指摘で、手遅れだと自覚したようだ。

深汐の顔を見つめながらメイエットは、白い犬歯けんじを覗かせてほくそ笑んでいた。

「それよりも、なかなかの音量だな。バナライイス」

「さ、さつきから何を言ってるのよっ！？」

腰を抜かしていた深汐は、メイエットのジーンズをつかみながらも立ち上がった。半歩後ずさつて竹刀を構えてから、深汐はメイエットに怒声を浴びせる。

「……小娘」

「ちよつと待ちなさい！　あたしは、メイエットに話があるの！」

「だから、小娘……」

飛竜のよだれが凍って粉雪になっているため、深汐の頭は冷やされていた。しかし、頭に血が上って冷静さを欠いているので、深汐は飛竜の言葉に耳を傾けようとしなない。

緋色の飛竜は溜息をついてそっぽ向いていた。深汐に相手されなかつたことがショックだったらしい。

一方、メイエットはふたりのやりとりを見るなり、何度もうなづいては拍手を送っている。革製の手袋のため、こもった音が響いていた。

「な、なに ひゃんっ!？」

感情的になつていいる深汐の頬に、メイエットは手に生成した氷の粒を触れさせた。拍手をしながら大気中の水分を集め、それらを生み出していたようだ。

「な、なにすんのよ!」

メイエットから冷たい仕打ちを受けて、深汐は反撃にと彼女へ竹刀を打ち込んだ。

「ふっ」

それを手で受け止め、メイエットは深汐に触れさせた手を鼻先に持つてきて、鼻を鳴らしていた。どうやら、匂いを嗅いでいるらしい。

「やはり、バニラアイスか」

首を左右に動かして、青い髪に付着する灰を払っているメイエット。

緋色の飛竜がここに落ちてから燃焼したものが灰となり、火の粉や雪とともに降ってきていた。校庭を吹き抜ける風は、それに反してひんやりと冷たい。メイエットが全身から放つ冷気によるものだろう。それによる影響からか、雪の量も少しづつ増えていた。

「さ、さつきから……そんなにアイスクリーム食べたければ、コンビニで買ってくればいいじゃないの!」

「まあまあ、冷静になれ」

その時、ふたりの足下に弾丸が撃ち込まれた。今の状況を思い出したふたりは、飛竜を背後に校門のほうを振り返る。どうやらそれは、自衛隊による警告射撃らしい。

『聞こえているのか!？ 被害があっても、こちらは責任など取れ

ないぞ!」

霜が付着した手袋で髪をすきながら、メイエットは左手を前に突き出す。

「だったら、さっさと戦車なり戦闘機で撃ち込んでくればいいだろう? 脂くさいエサどもが……たかが人ふたりのために砲撃をためらっているから、守れるものも守れないんだ。それがこの国の美德といえ、そうなんだがな……やれやれ」

「ちよっ!? あ、あんた……そんなことされたら、間違いなく死んじゃうでしょ!」

眉をひそめて物騒な発言をするメイエットを前にして、深汐は顔を赤くして怒鳴り散らしている。

「あっしがか? それともお前がか?」

「ど、ドラゴンも……一緒に、でしょ」

深汐が飛竜を気にかけていると知り、メイエットは溜息をついた。と同時に片方の口角を吊り上げて、何かを企んでいるようだ。

「バニラアイスがでしゃばらなければ、穏やかに治められたんだがな……」

「えっ? な、なんか言った?」

「いいや」

前に出した左手を握ったり開いたりして、メイエットはそこに白い吐息を吹きかけた。大気中に漂っていた水分が、その手の平に集まってゆく。メイエットはそれを凝縮させ、氷の刀を生成してみせた。その際に、メイエットの周囲に白い霧が発生している。

「な、なにそれ……あ、うっ」

「おっと、酸欠か? 配慮が足らなかつたな」

メイエットは空いた手で深汐の細腕をつかんでいた。

倒れずに済んだ深汐はその手を払って、竹刀をメイエットへと向けている。

「氷魔法を使う時は、酸素の消費量を考えないといかん」

「な、なによ……って、魔法?」

メイエットの口から出たその単語に、深汐は瞳を輝かせて食いく。

飛竜はメイエットが行使した魔法を見るなり、舌なめずりをしていた。興奮しているからか、額の一本角が微かに赤く発光している。「おや。純粋な反応だな。そういうのが見たかったんだ」

「て、てか、そういう場合じゃないでしょ！」

深汐は校門のほうを指差して、声高らかに叫んだ。深汐が示した方向を見やり、メイエットと飛竜は同時に嘆息していた。

警官隊と自衛隊によって構成された治安部隊の面々は、メイエットが氷刀つひやちを生成したことに驚きを隠せないようだ。それでもひるむことなく、前に立つ自衛隊は銃と盾を構えながら、深汐達がいるほうへ歩を進めていた。警官隊は学生と野次馬、報道陣を追いやった後に、透明で分厚い盾を構えながら自衛隊の後ろに位置している。

追いやられた野次馬と報道陣は撮影のためだけに、遠くから校庭へとフラッシュをたきつけていた。

「血気盛んな人間ばかりだな。急に文明が進んで、人間の服もそうだが……いろいろと変わったようだ。何があつたのだ？ 時流が急速にでも進んだのか？」

「はあつ？ あんたみたいなドラゴン、この地球上に存在するわけないでしょ！ そっちが勝手にやってきたんじゃないの!？」

飛竜を振り返り、深汐は感情に任せて発言してしまう。口走つてから冷静になつた深汐は、青ざめた顔をして飛竜から離れた。

「気にするな、小娘。なぜ私の声が、小娘に理解できるのかは……どうでもいいとして。私はお前ら小娘ふたりを乗せて、飛行すればいいのか？」

「ん？ 何を言っているんだ？ 通訳してくれ」

メイエットは飛竜が自分に向けて口を動かしたのを確認し、何か質問されたと感じたらしい。深汐にそうお願いしながら、メイエットは左右の腕時計を同時に確認していた。

「はっ？ わ、解つたわよ」

深汐は飛竜の言葉をメイエットへと伝える。

「ふむふむ、そうか。あつしは暴れ馬があるからだいじょうぶだ。バニラアイスに乗せた直後に、あつしがいるほうを向いたまま、全力で叫べと言伝を頼む」

「あ、う、うん」

今度はメイエットの言葉を、深汐は飛竜へと手振りも交えて伝える。

「なんだと？ ふんつ。どうなっても知らぬぞ」

メイエットと飛竜は目と目で合図して、同時にうなづいていた。

深汐はそれが気に入らず、ふたりの間に割り込む。

「ちよつと待ったあ！ 人を傷つけないで、殺さないで、何とか解決できない？ は、話し合いとかでさ」

メイエットはジャケットの裏から拳銃も取り出し、戦闘態勢を整えていた。

「あんな脂くさいエサどもと、悠長に談義するつもりはない」

そう言いながらメイエットは、氷刀の刃先を背中に触れるまで深く振り被っていた。右手にはナイトホークタロンが握られており、その銃口を自衛隊のほうに向けて牽制している。

「で、でもっ！」

「案ずるな。あつしは血を見るのが嫌いなんだ」

メイエットの言葉を耳にして、深汐はほつと胸を撫で下ろしていた。

額にかいていた汗を制服の袖でぬぐい、深汐は振り返って飛竜の目を見る。そのふたつの眼はルビーのように赤く、まっすぐに深汐の心を撃ち抜いた。

「よ、よしっ。あたし、あんたの背中に乗ってあげるよ。それで、安全なところまで導いてあげるから」

「ふふっ。そんなふうに安請け合いして、だいじょうぶなのか？」

メイエットの冷静な突っ込みに、深汐は満面の笑顔でうなづいてみせた。

とんでもないことに自分が巻き込まれていると自覚しながらも、深汐は意を決して飛竜へと近づいていく。

「むっ？　なんだそれは」

飛竜は深汐の手にある竹刀に目を留めていた。

それを知って慌てた深汐は竹刀を投げ捨てて、飛竜に敵意がないことをアピールしている。

「ね、ねえ。そういえばさ、あなたの名前は……？」

飛竜の気をそらすべく、恐るおそる深汐はそう質問する。

目を白黒させていた飛竜は、一度目を閉じてからこう答えた。

「レフォレーゼ、だったか。二つ名を太陽竜という」

「　　だった？　た、太陽竜っ！？」

「名などどうでもよい。さっさと乗れ」

首根っこに生えている錆色の体毛をつかんで、それを頼りに深汐は飛竜の背中へと上っていった。首筋付近をべたべたと触られて、レフォレーゼと名乗った飛竜は鼻をひくひくとさせている。と同時に、額から生えた一本角がちかちかと赤く点滅していた。

「おっと、これを受け取れ」

メイエツトは拳銃を口に咥えた後、ジャケットの裏から革製の鞘に収まったコンバットナイフを手にする。それを振り向かずに深汐のほうへと投げつけて、メイエツトは拳銃を構え直した。

「わわわっ。は、刃物じゃない」

「護身用だ。ないよりはマシだろう？　飛行中に落とすなよ」

それを受け取った深汐は、手を震わせながらもそれをスカート下のポケットに突っ込んだ。

「とりあえず、あつしがふたりを東京湾まで先導しよう。地上の敵は撃滅するが、空中のはそちらで何とかしてくれ」

メイエツトは校門のほうを向いたままで、氷刀と拳銃を構えて治安部隊を牽制していた。

「な、なんとかできるわけないでしょ！」

深汐はレフォレーゼの背中に乗り、その上からメイエツトを注意している。

その大声にレフォレーゼは目を閉じて、溜息をついていた。どうやら、思った以上にやかましいようだ。

「ふふつ。空の旅は気をつけるよ。F-15Jなり、F-2がうるついている。米軍機も顔を出しているはずだ。日米の両軍から、熾烈な歓迎を受けるのは必至だ。なるべく、ビルに脚がつく低高度を意識して飛んでいけよ？」

言い終えてメイエツトは武器を両手に持ちながらも、小指で両耳を塞いでいる。

それを合図と見た深汐も耳を押さえて、レフォレーゼは深呼吸をした後、全力で咆哮した。

「この、こわっぱどもがああああああああああああああああああああああああッッッ！」

烈風が吹き荒れ、校舎の窓ガラスほとんどが砕け散る。

その咆哮によって内耳ないじにある三半規管を刺激されて、校門と校舎付近には転倒者が続出している。一部には両耳を押さえて耐えた者がおり、彼らは果敢にも銃を構えて突撃しようとした。が、足下から不自然な白が襲いかかっていることに気がついて、足を止めている。正確には、足が凍りついて動けなくなっていたのだ。

落下していた窓ガラスの破片は丸い氷塊となり、氷雨ひやめとなって治安部隊へと降り注ぐ。

「こ、凍っつい」

「な、んだあ……っ!？」

前線にいた自衛隊は抵抗する間もなく、その奥にいる警官隊も、そのほとんどが武装とともに氷像ひやうと化していた。一部には氷雨を受けて亀裂が走っているものがある。

「な、何が起きたの……?」

「この冷えた大気……その、青い小娘の仕業か」

眼前が一瞬で白銀に彩られたことに、深汐とレフォレーゼは驚愕きょうがくして目を見開いていた。

拳銃を持つ手で青い前髪をかき上げて、そのメイエットは白い歯を見せて笑っている。

「フリージング・エア―」……氷結する大気、というべきかな。

いや、正確には凍ってるのは水だったわね」

メイエットが引き起こした現象は、大気中の水分を過冷却させたことよって起きたものだ。

過冷却とは、液体が固体になる温度を通り過ぎて冷却されても、液体のままに維持されていることを意味する。ゆっくりと冷却していくことで水は氷とならずに、気体か液体の状態を保ったままになるのだ。

その過冷却状態にある水は振動などの刺激を与えることによって急速に凍結して氷の結晶となる。今回の場合、過冷却の水滴と蒸気はレフォレーゼの咆哮によって凍結の条件を満たし、かつ吹きつけられる形で治安部隊に付着しながら結晶化していった。その際に校庭の一部と校舎の端、校門付近も凍りついて白銀世界ができあがっている。

「ねえ！ な、何をしたのよっ？ あれじゃ、凍死する人が出ちゃうじゃない！ 誰も殺さないって、言ってたでしよう!？」

「なあに。大気中の水分を過冷却させて、飛竜の咆哮をきっかけに霧氷むひょうを起こした。ただそれだけのことじゃないか。それにあっしは、一言も殺生をしないと口にしていないぞ?」

簡潔にそう説明したメイエットは振り向きざまに、ふたりの脇へと氷刀を放り投げた。

「きゃっ!？」

「むっ!？」

近くの地面で何かが炸裂したことに驚き、深汐とレフォレーゼは

身を伏せていた。

「戦車が榴弾りゅうたんを砲撃してきているぞ。ここでくたばるのが嫌なら、さっさと飛んでいけ」

その氷刀で大気中の水分を刺激して凍結を促進し、メイエットはふたりに砲撃が及ばぬように配慮していた。

大気中にある過冷却された水分と接触したことで、熱を帯びていた砲弾は急速冷却により金属部分が変形する。またその弾頭は氷が付着して丸くなり、それにより重量が増してふたりに届かず地面に落ちていく。そのふたつの凍結現象によって信管が起動して、空中もしくは地面で炸裂するものもあれば、不発弾として校庭に転がるものが多数あった。

それを目の当たりにした戦車部隊は一度砲撃を中断していたが、レフォレーゼを逃すまいと連続して砲弾を射出する。しかし、その榴弾はひとつとして届くことはない。

メイエットが起こした凍結現象は、静かに戦車へと襲いかかっていた。砲撃による振動が、過冷却された大気中の水分を刺激したからである。

「あんな熟達した凍術師フライオマンサーは、私は背中に乗せるのも勘弁だぞ……」
翼を飛ばたかせて、飛行を始めたレフォレーゼ。翼膜が破れているためか、それともメイエットの氷結する大気を恐れてか、飛ばたく姿に覇気は感じられない。

その背中に乗る深汐は、錆色の体毛を強くつかんで落ちまいと力んでいた。

「あの人……メイエットって、ほんとに魔法使いなんだ。あたしにも、あんな力があれば……」

感心する深汐を背に乗せていたレフォレーゼは、鼻を鳴らしてメイエットの体臭を嗅ぎ取り、ある確信を得たようだ。

「いや、あやつは……人間ではない。この二オイは……」
「えっ？」

体育倉庫のほうへと歩いていたメイエットは犬歯をさらして振り

返り、深汐とレフォレーゼのいる空をあおぎ見た。

「ふっ。あつしは吸血姫ヴァンプリマっていう種族なんさ。それと、思いきり飛んでもだいじょうぶだぞ？ あつしの氷たちは、お前たちには害を及ぼさないよう、言い聞かせてあるからな」

ヴァンプリマとは、ヴァンパイアとプリマドンナを合わせた、女性吸血鬼の敬称のひとつ。そのヴァンプリマは舞踊と歌唱による使用方式オィミユラで、強大な魔法を行使できる。一部には、魔法ではなく戦いくの行い方が踊りのように見えることから、その名が付与される者がいた。

また、ヴァンプリマは人間をエサと呼ぶことが多々あり、そのエサの血液の味を嗅覚や味覚で判断し、食べ物に例える風習があるそううだ。

「吸血鬼ヴァンパイア……いや、私が知っているのとは毛色が違いすぎる。呪文もなしで、あのような現象を引き起こすとは……」

「えっ？ 呪文ってな ぎゅっ」
飛行によって不安定に揺れていたために、深汐は発言の途中で舌を嚙んでしまう。

それを聴覚で察したレフォレーゼは、おかしくて吹き出していた。
「わ、わらいふおとじゃ みあっ」
「黙っている。舌がちぎれるぞ？」

涙目の深汐はレフォレーゼの注意にうなづいて、口を結んで錆色の体毛をつかんでいた。

そんなふたりのやりとりを下から聞いていたメイエットは、笑いながら体育倉庫に歩を進めていく。

「ん？ おや、これは深汐のか？」
その脇にある鞆を横目に、メイエットは左にある腕時計からワイヤーを射出した。その先端はフェンスの穴を通過し、アスファルトに固定された。

「まあ、落とし物は警察……じゃなくて、本人がいるから後で届けなくてはな」

左手で大きく円を描いて、メイエツトはそのフェンスをワイヤーで丸く切断してみせた。それを足で蹴飛ばし、通り道を作っている。メイエツトは左手で脇腹を叩いて、腕時計から射出したワイヤーを回収した。周りに気配がないことを確認してから、拳銃をジャケット裏にしまっている。

「さて、あつしの暴れ馬よ。待たせたな」

メイエツトは深汐の鞆を拾い上げて、それを手の平で淡い光で包み込んだ。一枚のカードと化した鞆をジャケットの裏にしまい、メイエツトは駐車していた黒いバイクに歩み寄る。そのシート下の収納から、フルフェイスメットを取り出して頭に被った。

「さて、久々に楽しく走れそうだな」

脇にある凍結した戦車を眺めながら、メイエツトはエンジンを吹かしている。

ちらりと空を見やったメイエツトは深汐とレフォレーゼを導くために、アクセルを踏み込みバイクで疾走するのだった。

氷結されていない路面に出て、メイエツトはバイクのサイドミラーを覗き見て、レフォレーゼが後ろからついてきていることを確認した。

「さて、今のうちに距離を稼ぐか。こんな刺激的な遊びを、すぐに終わらせるのもつたいないが……ふふっ」

バイクで疾走するメイエツトを捕らえようと、自衛隊の装甲車による追跡が始まっていた。

後方から迫り来るそれらを見て、メイエツトは昂揚を抑えられないようだ。

「おや、不可視の昆虫事件があつてからというもの……自衛隊の動きが滑らかだな。良き指導者でも見つかったか？」

メイエツトは左右の腕時計を確認し、それから前に立ちほだかる戦車を見やった。砲身は校庭に向いたままで、凍結はしていない。

右の腕時計からワイヤーを射出し、メイエットはその先端を戦車の右脇に撃ち込んだ。

「さあ、ショータイムだ！」

ワイヤーを撃ち込んだ反対側を通り抜けて、メイエットは戦車を真つ二つに切断する。

メイエットが脇腹を叩いてワイヤーを回収した直後、後方の戦車が炎上した。それを目の当たりにした装甲車は、驚いてブレーキをかけている。

メイエットが使用する腕時計。その中に仕込まれたワイヤーは、対象の分子間を擦り抜けて、その接合を切り離す。正確には、分離・切断というべきか。

その糸をメイエットは、ナノディバイダーと名づけている。このワイヤーは肉眼で捉えるには困難なほど細く、いかなるものも分断してしまう。ただし、メイエットが着用する革製の手袋、ジャケットには同じ繊維が編み込まれているために切れることはない。

糸を武器として活用するためには、引く力が必要である。その力がなければ、対象を分断することはできない。刃物も同様で、押すよりも引く力があつたほうが切断力を発揮するのだ。

「ほう？ 果敢だな……あれを見ても、まだ諦めないのがあるか」フルフェイスメットで覆い隠した中で、メイエットは歯噛みしていた。

追ってくるのは装甲車だけでなく、警察車両や白いバイクが数台確認できる。また空には戦闘機だけでなく、ヘリコプターも飛んでいた。

「大通りに出るか。そのほうが、あいつらも飛びやすいだろう。旦那も狙いを定めやすいし、ね。うふふ」

不敵に笑うメイエットは裏道を進み、大通りを目指すことにした。

深汐とレフォレーゼは息を飲んで、戦車を燃え上がるさまを上か

から見下ろしていた。

「やるな。あの小娘は、やはり覇者の臭いがするぞ」

その姿を目で追いながら、レフォレーゼは羽ばたいて空から彼女に追隨する。

「どうして、あんな簡単に人を殺せるのよ……」

強く錆色の体毛をつかんでいる深汐は、それを引き抜かんと力を込めていた。涙をこらえながら、深汐は自分の周りを飛び交うものに目を凝らす。

「どうした？ 小娘」

「あたしは、深汐だよ」

それが痛いというわけでもなく、くすぐったいのか。レフォレーゼは下を見ながら深汐に問いかけていた。

「小娘には違いなだろう？」

「いいから、周りを見てよ！」

五機編隊で飛び回る戦闘機が何組も、レフォレーゼの上を飛び交っていた。また背後からはヘリコプターが二機追いかけてきている。レフォレーゼはそれらを目にしても、気に留めてはいなかった。

「ねえ、もつと高く速く飛べないの？」

「翼膜が破れているゆえ、思いきった飛行はできん。それに、あの青い小娘も言っていただろう？ 低高度で飛べと」

「もしかして、住宅地を……この町の人たちを、人質にしてる？」

深汐はメイエットの考えを、そのように理解していた。レフォレーゼは「おそらく、な」と、自分なりの考えを伝える。

「そ、そんなつ！ って、まさか……あたし、も？」

体毛を強くつかみながら、深汐は後ろから迫るヘリコプターを見やった。それには機銃が取りつけられており、明らかに撮影用のものではないと解る。

武装ヘリの存在を知った深汐は、青ざめた顔で下にいるメイエットを注視した。

「間違いないだろう。あのメイエット、なかなかの策士だ。鋼鉄の

羽虫なり、緑色の甲虫といい……私単独では容赦なく攻めてきたが、
他が混じると手をこまぬくようだ。そこまで甘いのか？ 小童ども
め」

牙を打ち鳴らしつつ、レフォレーゼは笑っているようだった。

「わ、笑いごとじゃないよ。あたしがいることで攻撃をためらって
いるとしても、いつかはっ！」

冷や汗をかきながら、深汐はレフォレーゼの耳へ声を張り上げる。
「だろうな。たかが小娘ひとりで、守られようとはな……あるまじ
きことだ」

「え？ みぎやっ」

舌を噛んだ深汐を無視して、レフォレーゼはメイエットの上に位
置した。下を走る彼女は陽光が遮られたのを知って、バイクの照明
を点灯させている。

「な、なひをするすもりひゃのっ？」

「何度も言わせるな。舌がちぎれるぞ」

メイエットが大通りに出たのを確認して、レフォレーゼはさらに
高度を落として飛翔する。

「なんだ？ 赤に青、白い、黄色……？ 変なのがうるついている
な。妙なものを転がして、人間は何を遊んでいるんだ？」

「く、車だよっ」

大通りでは停車している警察車両がいくつもあり、交通規制をか
けて車や人が学校に近寄らないよう配慮していた。しかしそれも、
レフォレーゼが飛び立ってしまっただけは無意味である。

「くるま？ ふんっ。そんな役に立ちそうもない彩りダンゴ虫を、
どうして灰色の道に転がしているんだ？」

「いや、だーかーらーっ。あれは、あたしたちの世界ではポピュラ
ーな移動手段なの」

「ほう？ ダンゴ虫を転がして移動するなど、実に下らん遊びだな」
レフォレーゼの勘違いが酷くて、深汐は溜息をついていた。

「むっ？」

「きゃっ」

その時、反対車線のほうに何か着弾して炸裂した。

右手側で爆発が起きて、メイエツトは照明を消した後に上を見やる。

「ミサイルだっ!? なぜ直接こっちを狙ってこない? ちい…
…やってくれたなあっ!」

そのミサイルは大通りから離れようとしていた車の列を、木っ端微塵に吹き飛ばしていた。炎上する現場からは黒煙が立ち上り、悲鳴と怒号がこだましている。

「ちよつと! ねえ、これはどういうことなのっ!?!」

上から聞こえる深汐の声に、メイエツトは振り向かずに手振りで先に進むよう合図した。それから再加速して、大通りをバイクで疾走する。

「関係ない者は、急いでここから離れるおっ! 自衛隊はイーグルを、米軍はホーネットにライトニング? も出して、なりふり構わずに攻めてきているぞ!」

空を飛ぶ高速の機影を一見ただけで、メイエツトはすでに米軍も実動していることを見抜いていた。

そのメイエツトの叫んだ後に、大通り付近に残っていた人や車は、蜘蛛の子を散らすように逃げ出していく。またレフォーレーゼを追跡していた二機の武装ヘリは、ミサイル着弾地点の上に停空ていくうしながら、拡声器にて市民の避難を促していた。しかしその忠告にはノイズが混じっており、正確に伝えることができていない。

「急いで旦那に な、なにっ?」

バイクで走りながら、メイエツトはジャケット裏にある携帯電話を取り出した。だが、画面には圏外と表示されている。

「ん? 計器が、乱れている…なぜだ?」

それに気づいたメイエツトは携帯電話をしまいながら、深汐のあ

る言葉を思い出した。

『 だった？ た、太陽竜っ!？』

(電磁波か？ だったらなぜ、校庭に墜落する前はミサイルに当たって ああ、なるほど。あれが発生源だな?)

レフォレーゼの赤く発光する一本角を振り返り、メイエツトは確信を得ていた。

「そういうことか。なら、一刻も早く深汐を下ろしてやらないと……」

メイエツトは上空からやってくるミサイルを一見して、ジャケット裏からナイトホークタロンを引き抜く。そしてその銃口を横を通り過ぎるはずのミサイルへ向けて、トリガーを引いて発砲した。

「ぐうっ!?!」

メイエツトの右横で起きる爆発。姿勢を崩しながらも、メイエツトは交差点の信号手前で何とか停車した。

「深汐！ 周りにいる日本人を、全力で守り通せええええええええええっ!」

頭に被ったメットを外して、メイエツトはあらん限りで声を張り上げた。

メイエツトの絶叫を耳にして、深汐は後ろを振り返った。

「また誰かを、犠牲にするというの……? そんなの許せないよ……」

その深汐のつぶやきを耳にしたレフォレーゼは、深呼吸して武装へりの前を羽ばたく。

「何があったか知らないが、新たな鈍色にびいろダイコンが飛んできているようだな」

深汐はレフォレーゼの首を叩いて、声高らかに叫んだ。

「早く逃げてええええええええええええええええっ! なんてか知らないけど、関係ない人を狙っているみたいだよおおおおおおお

「お！」

その叫びの合間に、背後にいる武装ヘリの一機が爆発した。直後、ミサイルの雨は住宅地と大通りに容赦なく降り注ぐ。それらはレフォレーゼと深汐、メイエットに被害をもたらすことはなかった。

「え？ きやつ」

レフォレーゼはすぐさま反転し、爆風と破片が深汐に当たaraぬよう配慮していた。

「ぶ、無事か？ 小娘」

「な、なんとか……」

何が起きたか理解できていない武装ヘリの一機は、機銃を乱射しながらレフォレーゼへと迫り来る。鉛弾の雨にさらされて、レフォレーゼは激昂げっこうしていた。

「くっ。敵対するならば、容赦はせんぞ！」

「だ、ダメだよっ！」

深汐の制止を無視して、レフォレーゼは深呼吸した後に熱線で応戦した。それは武装ヘリを貫通し、アスファルトを黒く焦がしてゆく。レフォレーゼは首だけを後ろに向けて、上空から降り注ぐミサイルの雨を熱線で薙ぎ払った。真っ青だった空は、瞬く間に赤と黒に染め上がる。

「わわっ。な、なんで……なんで、あんなにミサイルを……」

熱線を吐ききったレフォレーゼは、黒いゲップを出していた。

「向こうからすれば、私らは排除すべき敵だ。どうやら向こうは、腹を括つたらしいな？」

レフォレーゼは黒い息を吐きながら、その額の本角を赤く輝かせていた。

錆色の体毛をつかんで、深汐は下にいるメイエットを見やる。

「ねえっ！？ このままじゃ、関係ない人がまた巻き込まれて……

え？」

下にいるメイエットはバイクにまたがり、手振りについてこいと示してから再び走り始めた。

「とにかく今は、あやつについていくのが得策のようだな」
「そ、そうみたいだね」

バイクで疾走するメイエットは、日本と米国が力を合わせて攻めてきていることに焦りを禁じえなかった。

「日米両国は何がどう転んでも、後ろの飛竜が欲しいらしいな」

上空を飛び交う戦闘機から黒い影がひとつ落とされた。それを見上げて、メイエットは冷や汗をかかされる。

「ちいつ！？ やけを起こして、爆弾を投下するとは……くっ」

メイエットは左腕を上げて、その人差し指で深汐とレフォレーゼに危機を知らせた。

「グガアアアアアアアアアアアッ！」

吠え猛るレフォレーゼは深呼吸した後に、熱線を吐き出してその爆弾と戦闘機を撃ち抜く。翼をやられた戦闘機はレフォレーゼの後方に墜落した。パイロットはすでに脱出しており、パラシュートを広げて降下しながら飛竜を見下ろしている。

「深汐、とかく危険なものは全て空中で撃ち落とせ！ あいつらは、この町を燃やし尽くしてでも……飛竜という検体が欲しいようだぞ！」

眼前に立ちふさがる警察車両、装甲車に戦車。その日本の治安部隊の後方には、米兵の影がちらついていた。それを目の当たりにしてメイエットは、日米どちらが優位に立っているかを確信する。

「なるほど。丸め込んだな……っ!?」

メイエットは路面に転がるまきびしを見つけて、バイクに立ち乗りして跳躍する。それを踏みつけて前後輪はパンクするが、勢いは止まずに車両の壁に突っ込む。身構えていた日米の連合部隊の面々はそれに驚いて、車両の陰に隠れていた。

「甘いな」

低い声でそうつぶやいたメイエットは空中で拳銃を手にして、自

分のバイクの燃料タンクを撃ち抜いた。炎上するバイクは猛スピードで突っ込み、警察車両に衝突して大破した。

「この弾幕は……くうっ！」

アスファルトの上に着地した直後、アサルトライフルのM16とM4で銃撃されるメイエット。彼女の周囲に吹雪く風がその弾丸を氷結させた上に軌道をそらし、アスファルトの上に氷の粒を転がしている。狙われたメイエットは、一発たりとも被弾していない。

「日米連合に力押しされては、いつかは……」

連合部隊の歩兵はメイエットを、上空を飛び交う戦闘機はレフォレーゼを狙っていた。この統率が取れた動きを見るなり、メイエットは自衛隊が米軍に懐柔されたと確信する。

アサルトライフルから放たれる弾丸は、吹雪によって氷結された上で往なされている。だが、その弾丸は着実にメイエットへと迫っていた。メイエットを守護する吹雪は、湿度が低い環境下では充分な力を発揮できない。弾丸ひとつをそらすだけでも、相当な湿度を消費するからだ。

「あゝあ、ああゝああゝ」

メイエットは深く呼吸した後、甲高い声で歌唱を始めた。それに呼応するように吹雪の勢いが増して、弾丸は流動する雪氷せいひょうによって阻まれる。メイエットを守護する氷の力は、白い大波となって歩兵部隊に襲いかかっていた。

「う、うわああああっ!？」

「我々が、凍らされて……なる、も……」

銃撃することは大気を振動させることにも直結する。発砲音だけでなく弾丸によって、だ。歩兵の半数が瞬く間に凍結していくが、銃撃はいっそう激しくなっていた。メイエットとレフォレーゼがこの場に足止めされているため、日米双方の援軍がこれを好機と見て包囲しながら迫ってきているのだ。

「ま、まずいな……湿度が、足りなくなってきた。それに、敵の数があまりにも……」

「グガアアアアアアアアアッ！」

メイエットの窮地を見兼ねたレフォレーゼは、眼前に立ちほだかる連合部隊へと熱線を吐き出す。横薙ぎに放たれたそれは、連合部隊と車両の壁を瞬く間に一掃した。灼熱の炎の中から聞こえるのは爆音と断末魔のみ。その光景を目の当たりにした増援は一度足を止めていたが、今度はレフォレーゼへと銃撃しながら包囲してくる。

「な、何をしてるのよっ!？」

背中で怒鳴る深汐を無視して、レフォレーゼはメイエットを見下ろしていた。その紅の瞳を見つめ返して、メイエットは青い眼まなこで飛竜を駆る深汐を凝視する。

「ぐっ……っ!？」

不意に、レフォレーゼの表情が険しくなる。羽ばたく翼が、ほんの一瞬だけ動きを止めたように見えた。

「腹を括れええっ! 深汐おおおおおおおっ!」

まだ迷いを見せている深汐に対して、メイエットは怒号を浴びせた。

「本当に守りたいものがある時に、戦わないで見守っているだけか? あっしのように、戦ってみたいと思わないか?」

「な、何を言ってる……?」

メイエットは高らかに左手を上げて、五本の指で何か合図している。犬歯を覗かせて不気味に笑うさまは、もはやケダモノ染みている。

「人間なんぞ、本性を見せればこんなものさ。深汐はその緋色の飛竜を守りたいんだらう? ならば、戦え。見ているだけでは、何もかも失うばかりだぞ」

言いながらメイエットは、ナイトホークタロンから弾倉を引き抜いていた。ジャケット裏から入れ替わりに取り出したのは、紫に着色された弾倉。それを差し込んで、残存している連合部隊へと銃口を向けている。

「まだ試作品だが……使わせてもらおうよ、ちんちん智也」

メイエツトが深汐とレフォレーゼに背中を見せた瞬間、上空を飛んでいた戦闘機が不意に爆発した。

とあるビルの屋上。

そこにある転落防止用の金網フェンスは、工具で切断されて丸い穴が開いていた。その前にうつぶせとなって狙撃しているのは、黒ずくめの格好のひとりの男性　メイエツトの夫、工藤^{くとう}智也だ。

充血した目で空を飛ぶ戦闘機を追っている智也の容姿は、ほこりだらけの短い黒髪に、オイルで黒く汚れた頬と軍手。黒い革製のジャケットに袖を通し、濃い青のジーンズに足を通していた。彼は白い毛のヘッドホンをしながら、大通りを狙撃銃のスコープ越しに眺めている。

「強烈な電磁波が発生しているのか。これじゃ、機械に頼っている連中はまともに戦えないだろうな。ま、混乱して戦闘機が旋回しているから……狙いやすくて、感謝だぜ」

この一連の事件をリアルタイムで観測しながら、智也は大音量でラジオを聴いていた。しかし今は、耳が痛くなるほどのノイズがヘッドホンから鳴り響いている。

「まだまだ、こいつの有効射程内だ。オレの嫁を狙うたあ、よろしくないねえ」

智也が使用しているのは、L115A3スナイパーライフル。これで武装ヘリと戦闘機の燃料タンクを射抜いて撃墜していたのだ。それに込められた弾薬は338ラプアマグナム弾で、これは千五百メートル先までが有効射程とされている。気象状況次第では、二千六百メートルまで届くという記録もある弾薬だ。

「メイちゃんつてば、相変わらずひとりで頑張るんだから。嫁なんだからさ、もうちつとオレを頼ってもいいんじゃないかなあ？　ま、手信号で合図出す前に……こちらは、ちょっとかいは出してるんだけどよ」

足止めされているメイエツトと飛竜の姿を捉えて智也は、ちらりと横にある黒いバッグを見やった。

「回収ポイントはふたつしかないんだぜ……？ オレの近くにあるトラックか、東京湾にある船舶か。このまんまの状態だと、港に向かうにや困難だな。携帯も繋がらないし、どうやってこっちの意思を伝えりゃいいんだ？」

再び狙撃銃を構えて、智也は戦闘機のコクピットか燃料タンクに狙いを定める。

「おや、メイちゃん。ついにアレを使うんか……なら、こちらも派手に援護してやらにや」

智也はトリガーを引いたが、放たれた弾丸は何にも命中しなかった。

「外したか……射程もギリギリか？ しゃあねえ……メイちゃんがアレを使うんじゃ、こちらもアレを使用するしかねえな。空気抵抗を受ける有質量弾ゆうしつりょうだんの精度が気になるが、誤差はさほどでもねえだろう」

現在握っている狙撃銃を脇に置いて、智也は黒いバッグから白銀のライフル銃を取り出した。

智也が握るそれは、ミスリル銀製の魔装銃まそうじゅうの試作型。見た目こそ銀のライフル銃だが、細部の作りが異なっており、稼働状態となつたその溝が七色に発光している。弾倉を差し込む部分がふたつあり、今は紫に輝く容器と白銀の弾倉が装填されていた。通常のライフル銃と比べて目立つのは、大きくなつた弾倉部分と発光する溝くらいだろう。

智也の握るこの魔装銃は、色マナを含有する魔石を組み込んだ容器と、ミスリル弾を詰め込んだ弾倉の両方を装填して真価を発揮する。紫の容器は氷属性を有する、紫マナという魔力が込められている。

「メイちゃんが属性感応弾ぞくせいかんのうだんを使うなら、こちらもぶつ放すぜえ」

属性感応弾とは、属性を有する色マナを弾丸に吸着もしくは浸透

させて、発射で生じる運動エネルギーで、そのマナが持つ属性を増幅および昇華させる弾薬のことだ。これはミスリル銀の弾薬である。これを開発する際に参考にされたのは、拳銃用の357マグナム弾とライフル用の338ラプアマグナム弾を初めとする、威力と弾道直進性の高い弾薬ばかりだ。

通常、弾丸は回転運動を与えられて放たれる。それによって空気抵抗によるブレが軽減され、直進性が高まるのだ。この弾薬は、ミスリル銀の含有する純度の高いマナと浸透させた色マナのふたつを、その回転と前進する運動エネルギーで摩擦させることで属性の活性化を行う。つまりこれは、発射することでミスリル弾を属性弾へと変化させる代物なのだ。

「さてと、オレの嫁を狙ったツケを……その身で、味わうがいいさ」
その魔装銃の銃口を地上の連合部隊へと向けて、智也はためらいなくトリガーを引いた。

「眠るがいい」

低い声で冷たくつぶやいて、メイエットは拳銃で発砲した。その弾丸は発射されたと同時に吹雪をまもって直進し、着弾してから大気中の水分を集中させた上で凝固させ、巨大な氷塊を作り出す。その氷塊はまるでドリルのような渦巻く形状をして、アスファルトをえぐって静止していた。

「う、うわあああつ!?!」

眼前にいる仲間が氷塊に閉じ込められて、パニックを起こす地上の連合部隊。また上空から戦闘機の破片が落下して、それらは偶然にも彼らを巻き込んだ。

「もう、こんなわけのわからないものと付き合っていられるかあああ
つ!」

「うおおおおおおおつ!」

やけを起こした日米の連合部隊は、レフォレーゼへと一斉に銃撃

を浴びせる。

「そのようなものなど、凍結させ　えっ？」

「豆鉄砲ごときに、私の鱗……が、ぐうあー！」

メイエツトとレフォレーゼは、相手が今までとは異なる弾薬を使っていることに気がつく。そこに追い撃ちをかけるように、レフォレーゼの背中の中が弾け飛んだ。

「え、なにっ？　どうし　きゃあっ！？」

敵の銃弾を浴びたレフォレーゼは、飛行できずに墜落した。幸いにも高度が低かったため、深汐は錆色の体毛をつかんでいたため、落下せずに済んでいる。

「徹甲弾てっこうだんに、対物ライフルたいぶつだと！　まずい」

メイエツトは血相を変えて、遠方で伏せ撃ちしている射手へと氷結弾を放った。それからレフォレーゼを銃撃する歩兵部隊を、氷結弾で氷漬けにしていく。レフォレーゼに徹甲弾と対物ライフルが有効だと知った歩兵部隊は、次なる脅威のメイエツトへと銃口を向けていた。

「あの女も、さっさと撃ち殺してしまえ！」

「うおおおおおおおっ！」

氷結する大気でも押し留めることができない徹甲弾は、氷をまとった状態でメイエツトの右頬をかすめる。

「くっ。急に貫通力が　なっ！？」

メイエツトが驚いたのは敵の攻撃にではない。ほんの一瞬の間に、自身と深汐とレフォレーゼが氷壁に囲まれていたからだ。それはメイエツトの放つ氷結弾より巨大な、渦巻く形の氷塊を作り出している。

「智也……か？」

ぼうつとしていたメイエツトは、流血して倒れているレフォレーゼを見やっつて我に返る。メイエツトは氷結弾と吹雪を用いて、この場に氷のドームを作り出そうとした。残存する部隊が徹甲弾を撃ち込んで氷の外壁を削っているが、どこからか放たれる氷結弾がその

ドームの形成を助け、かつ敵を氷漬けにして無力化している。

「もう少しだ。もう少しで、倒せるぞ！」

「あつははははっ！」

自身の理解を超えた事態を目の当たりにして、狂乱して発砲している者が複数。その暴拳を見逃しはしないと、遠方から放たれる氷結弾は次々と彼らを氷像にしていく。

「これで、後は……智也に任せればいい」

巨大な氷のドームを隙間なく形成したメイエットは、血だらけで苦しむレフォレーゼと、その顔に寄り添って呼びかけている深汐へと歩み寄った。

「ちよつと、ねえっ！ いつの間に、こんなに深い傷を……」

「あいつらはいつの間にか、徹甲弾と対物ライフルを使用した。いくら飛竜の鱗といえど、そんなものを浴びたらひとたまりもない」
メイエットは苦しむレフォレーゼへと手をかざした。

「な、にをするつもりだ……？」

レフォレーゼの言葉は理解できないメイエットだったが、その表情を見るなり大体は察したようだ。

「あつしに身を委ねろ。一度カード化してしまえば、その生物が致命傷を負っていたとしても……それ以上は悪化しない。通常よりは進行が遅いが、自然治癒で確実に元気になる」

「か、カード？ な、何を言ってるのよ!？」

深汐はメイエットの発言を理解できず、レフォレーゼに抱きついて手と制服を血で汚していた。

「それだけの巨体だ。引き連れて逃げ回るのも、無理な話だったんだ」

「なっ？ それって、最初から穩便に解決できる方法があったのに……遊んでたつてことなの!？」

「あつしは言つたはずだよ。お前が来なければ、穩やかに解決できたはずだと。まあ、遊んでいたのは事実だがね」

メイエットが低い声色でそう言い放つと、深汐は彼女から目をそ

らして歯を食い縛る。虫の息のレフォレーゼの目を見つめ、深汐は首を左右に振っていた。

「今はこの状況を嘆いてもしょうがない。あっしの暴れ馬も壊れたし……飛竜も、重傷を負っている。少々荒っぽくなるが、智也の下へ向かうしかないな。派手に援護しているようだから、向こうもじつとはできていないだろうが……」

「ともや……?」

「あっしの旦那だ。さっきから、遠方からどでかい氷結弾をぶっ放しているだろう? たたく、陽動するにしても派手にやりすぎだぞ。どうして智也はあっしの作戦通りに、隠密に狙撃してくれないんだ。あれだけ目立ったら、こちらが心配になるぞ……」

ふたりと一頭を守護する氷のドームを守ろうと、ひっきりなしに氷結弾が飛び交っている。ドームを破壊しようとしていた歩兵部隊は、正体不明の狙撃手の存在におびえて、逃げ惑っていた。その敗走する歩兵を逃すまいと、氷結弾は大通りを白銀に染め上げていく。「それと深汐」

「な、なによ?」

「急にミサイルに精度がなくなり、今こうして上空からの攻撃は止んでいるが……どうしてだと思っ?」

「そ、そんなの知らないわよっ! は、早く……レフォレーゼを助けられるなら、なんとかかしてよっ!」

レフォレーゼという名を知り、メイエットはにっこりと微笑む。

「全てはそのレフォレーゼが原因だ。その飛竜から強い電磁波が放出されている。それと同時に、放射線もかなりな」

「……え? な、何を根拠に」

「深汐。お前はあの飛竜に対して、太陽竜と言っていたな? 太陽が発するエネルギーを悠長に語る時間はないが、一刻も早くカード化して逃れないとまずい。現にあっしらは、レフォレーゼから放射線をじかに浴びているからな」

それを耳にして、深汐はレフォレーゼから身を離した。それはほ

んの一瞬だけで、すぐに深汐はレフォレーゼの頬を手で撫でている。
「さつさと……救助できるならしろ、戯けが。こちらも、長くは持たんぞ……？」

「ん？ 何て言っているんだ？」

レフォレーゼの言葉を解読できないメイエットは、首を傾げながら深汐に訊ねた。

「早く助けるって言うてるよ」

「なら、カードとなることを受け入れるんだな？ それだけの巨体だ。抵抗があると、こちらも消耗するんでな」

メイエットはレフォレーゼに近づいて、冷や汗まじりにその顔へ手をかざす。氷のドームの中で横たわっていたレフォレーゼは、光に包まれて一枚のカードとなった。それはひらひらと宙を舞い踊り、深汐の手の平に乗る。

「深汐。決断しろ」

「え？」

「そのカードをあつしに預けて、このまま連中に投降するか。それとも、いかなるものを相手にしても構わないと……その覚悟の上であつしと共に来るか」

「な、何を言ってるのよ？」

「なあに、単純なことさ。緋色の飛竜を庇い立てした時点で、あつしらが国賊扱いされるのは当然だろう？ だが今なら、深汐を巻き込まずに済むかもしれない。現に深汐は、誰にも手を出していないのだから。だからあつしは んん？」

氷のドームの真上で爆発が起きた。電磁波の影響から免れた戦闘機が態勢を直して、ドームへと爆弾を投下したのだ。しかしその戦闘機と爆弾は、遠方から飛来する電撃弾によって弾け飛ぶ。

「属性を変えたな……？ 深汐、早く決断しろ。お前だけがここに残って投降するか、それともあつしについてきて……その飛竜と、いちれんたくしょう一蓮托生となるか」

メイエットの国賊という言葉はんすうを反芻して、深汐は意を決して顔を

上げた。

一方その頃、智也はビル屋上からの狙撃を中断し、背後へと氷結弾を放っていた。

「これで、出入口は塞いだぞ」

敵の襲撃を予期して、智也は先手を打っていた。屋上に通じる扉は氷結弾によって、分厚い氷塊によって塞がれている。戦闘機やへりは智也の姿を捉えているようで、そのビルの周囲を旋回していた。また警察車両に装甲車も、智也のいるビルを取り囲んでいた。

「四面楚歌は勘弁だが、まずは」

智也は魔装銃から容器と弾倉を引き抜き、それらをジーンズのポケットに突っ込んだ。

「オレの嫁に手を出した、不届きな八エめ。落ちろ」

それから黒いバッグから橙色に輝く容器と新しい弾倉を取り出し、それを白銀の魔装銃に差し込んだ。続けざまに智也は氷のドーム上空を飛び交う、戦闘機の編隊へ銃口を向けてトリガーを引いた。

白銀の魔装銃から放たれる電撃弾。それは青白い残光をまき散らす、横一線に駆け抜ける稲妻だった。それが近くを通過するだけで、戦闘機が放ったミサイルと爆弾が誘爆する。また、電流が戦闘機の燃料タンクを刺激して、それを木っ端微塵に粉碎した。

属性感応弾には、扱う属性によって有質量弾か無質量弾の二種に分けられる。氷結弾は有質量弾で、つい先刻に智也が撃ち出した電撃弾は無質量弾となる。

「さて、八エは一掃できたし……逃げることを、考えねえとな」

有質量弾は、属性そのものが質量を有する。氷結弾でいうならば、発射から着弾の過程までに弾丸が氷をまとうのだ。それが弾丸の重量と、また空気抵抗の影響を増してしまう。それによって精度が損なわれてしまうため、有質量弾は本来の有効射程がかなり短くなる。無質量弾は、属性そのものが質量を持たない。電撃弾でいうなら

ば、広範囲に雷電が及ぶことは明らかだ。しかし、弾丸と色マナによる属性活性化の影響で、有効射程はわずかだが短くなる。

「さあてと、お次は」

智也は近くを飛び回る戦闘機とヘリに向けて、電撃弾を撃ち込んだ。連射されるそれらは直撃こそしていないが、増幅された電流が航空機の燃料タンクを刺激して誘爆させる。

ビルの周囲だけに限らず、氷のドームの真上にも、空を飛ぶ機影はひとつ残らず存在しなくなった。

「下には回収と逃走用のコンテナトラックがあるからな……じゃあねえ。使いたくなかったが、アレをやるか」

智也はまた容器と弾倉を引き抜き、それを黒いバッグに放り入れる。それからジーンズのポケットにあつた弾倉だけを再装填した。続けざまに破つた金網から身を乗り出し、智也は警察車両と装甲車を狙い撃ちする。

智也が用意したトラックを除いて、ビルを取り囲む車両はほとんど凍結していた。それだけでは不安なのか、智也は治安部隊がいなか目凝らして、見つけては発砲を繰り返している。

「トラックが通る道は、火炎弾でどうにかすりゃいいか」

紫の光を帯びていた弾倉を引き抜いて、それを再びジーンズのポケットに突っ込む。

「さて、こっから飛び降りないとな」

赤く輝く容器と新しい弾倉を黒いバッグから手にして、それらを魔装銃に装填する智也。黒いバッグを脇に抱えた後に、智也は破れた金網から身を投じた。

「さあ、もういっちょ暴れてやろうか！」

銃口を下に向けて、智也は火炎弾を魔装銃から撃ち出した。その反動で落下速度を緩和し、巨大な炎でビル周囲に張りつく氷塊を溶かしていった。

遠方からの支援射撃が止んだのを見て、氷のドーム周囲にいる残存する部隊は、メイエットと深汐を撃つべく銃撃で氷を削っていた。「戦うよ。守るためなら、あたしは……なんだか知らないけど、レフォーゼをほっておけないの！」

深汐はメイエットの瞳を見つめながら、震える手でコンバットナイフをスカートのポケットから取り出した。

「それは、あつしがくれたやつだな。護身用に使うといい」

「……ねえ」

「ん？ どうした。おじけづいたか？」

「ううん。メイエットはどうして、レフォーゼを救い出そうとしたの？」

拳銃を持ったまま腕を組んだメイエットは、にこやかに笑ってこう答えた。

「今の深汐と、同じ気持ちだよ」

「そ、そっか。弱いものを、守りたかつたんだね」

ジャケット裏にある携帯電話が振動していた。それに気づいたメイエットだが、取り出して確認しようとしな。その相手が誰なのか、見なくても理解できたようだ。

「ふふつ。顔見知りでもなんでもないんだがな。だとしても、見過ごすことはできないんだ。だからあつしと智也は、危険を冒してまで……飛竜を救出しようと考えた。手を伸ばせば救い出せるかもしれないものを、みすみす見殺しにするのは胸くそが悪いんでね」

「それ、あたしも同じ気持ち」

「うふふ。そうだな。その飛竜を放置すれば、どのような末路があるかは容易に想像できた。まったく、人間とは実に愚かだ。自分たちを守るうと頑なになりすぎて、それから傷つける行為に走ることを防衛と呼んで正当化している。まるで機会さえあれば、防衛で相手を殺めることが邪道ではないと言わんばかりに」

深汐はレフォーゼのカードを握ったまま、おもむろに立ち上がった。メイエットをにらむように見る深汐は、今まで抱いていた疑

問を彼女に投げかける。

「どうしてさ、レフォレーゼが攻撃されなくちゃいけないの？ 何か、悪いことしたの？ 現に、攻撃されて……やり返しちゃったけどさ」

「それが弱肉強食だ」

「な、なんですって！？ あたしらは、獣じゃなくて人間でしょうっ！」

「人間だからといって、ケダモノでないという保障はどこにある？ 現にあつしらは、こうして自衛隊と警官隊、在日米軍の歩兵どもに狙われている。こいつらは、脂くさいケダモノじゃないというのか」

メイエットの冷たい眼光を受けて、深汐は歯を食い縛った。その眼光から獣性を感じ取ったからだ。

「済まない。まだ、何か聞きたいことがあるような目だな」

「ねえ、あたしはなんで……レフォレーゼの声を、理解できたのかな？」

「さあな。通じ合うものがあつたから、声が聞こえたんだらう？ ならそれでいいじゃないか。今こうして立っている深汐は、気高く美しいぞ」

メイエットは肩をすくめて、あっさりとした返事をする。その視線は深汐から、氷のドームの外にいる歩兵に向けられていた。

「何か騒がしいな。……いや」

「きゃっ!?!」

メイエットは深汐の頭をつかんで、強引に伏せさせた。刹那、氷のドームが一瞬で消し飛んだ。

「ひゃっほっおいつ！」

トラックを片手で運転しながら、智也が車窓から右腕を出していた。その手で握る白銀の魔装銃で、火炎弾を乱撃ちしている。その紅蓮の炎は、メイエット自身が放った吹雪や氷結弾によってできた氷塊を、もの一瞬で溶かしていく。

「さあ、乗りな！ お譲ちやんたち」

ふたりの隣で急ブレーキをかけた智也は、白銀の魔装銃片手に後ろを指し示した。

「深汐、後ろのコンテナに乗り込むぞ」

「え、ええっ!？」

「なあに、頑丈にできてるからだいじょうぶだ。……多分」

「た、多分ってなによ きゃあっ!？」

メイエツトは深汐の手を引きながら、拳銃片手に残存部隊へと氷結弾を撃ち込んでいく。搭乗を阻止しようと銃撃する歩兵も数人いたが、火炎弾によって氷が溶かされたため、メイエツトとトラックの周囲には荒れ狂う吹雪が舞い踊っていた。湿度が濃い環境では、徹甲弾ですら吹雪によって氷結されて、地面に転がされてしまう。

「自衛官を数人残せたな……よしっ。智也、発進しろ！」

メイエツトは残存している歩兵と車両を目で確かめて、ほくそ笑んでいた。

「あいよおっ！」

メイエツトは深汐を奥へと放り投げて、トラックを破壊しようとする歩兵を氷結弾と吹雪で狙い撃つ。走り出すトラックの前方を除いて、その周囲は分厚い氷壁ができあがっていた。

「あいたたた」

メイエツトに乱暴な扱いをされて、深汐は頬を膨らませていた。それから落としていたコンバットナイフを拾い上げて、レフォレーゼのカードを大事そうに、胸ポケットの生徒手帳の裏側にしまう。「さて、これであっしらは……日本と米国の両国を、敵に回したわけだ」

それを耳にして、深汐は身震いした。いざそうなってしまうと、不安を感じずにはいられない。

不安で深汐はコンテナ内を見回すが、この中には深汐とメイエツ

ト以外には何もなかった。

「案ずるな。逃げ回るのは、あつしらだけで充分だ」

「ど、どういう意味？」

「なあに。不測の事態に対応できてこそ、本物の戦士ってことさ。この腕で抱き締めることが、本当の意味で守るということにはならない」

深汐はメイエットの持つ、銀色の拳銃が気になっていた。

「ねえ、それって……なんで、氷の弾丸を撃ち出せるの？」

「んっ？ ああ。弾倉部分そのものに、氷属性を帯びた紫の魔石が内蔵されていて、それが銃自体のラジエータの機能を果たしている。このナイトホークタロンはミスリル銀製のもので、357マグナム弾と属性感応弾の両方が扱えるように、特注でこしらえてもらったんだ。で、紫の弾倉にはミスリル銀を用いた属性感応弾が装填されている。こいつは氷属性を込めることで、発砲直後に氷結弾と化すように細工がされているんさ」

説明しながらメイエットは、その銃口を深汐の額へと向けていた。

「え……？」

「悪く思うな。なにっ？」

とつさの反応で深汐は、鞘に収まったコンバットナイフでその拳銃を弾き飛ばした。拳銃はトラックのコンテナの隅へと転がっている。

「ほう？ 反応はいいな」

開け放れたままのコンテナの戸。装甲車が後ろから追跡していたが、ふたりは構わずにらみ合っている。

「あたしを、だましていたの？ チャンスがあれば、あたしを倒して……レフォレーゼを、奪うつもりだったのっ！？」

「勘違いするな。説明している暇はないんだ。さつさとやられておけ」

友好的ではないメイエットの態度を見るなり、深汐は鞘からナイフを引き抜いた。白銀のナイフの刃先は、震えながらもメイエット

へと向けられる。

「あくまでも、抵抗するのか。面倒だな」

右手で青い前髪をかき上げて、メイエットは小声で歌唱する。

「らら〜らああ〜」

それを予備動作と見た深汐はナイフを逆手に握って、その峰でメイエットへと殴りかかる。屈んでその一撃をかわしたメイエットは、拳銃を拾おうと奥へと前転した。

「待てえ！」

「あ〜あああ〜あああ〜」

片膝を崩したまま、勢いよく手を合わせたメイエット。歌唱を続けながら彼女は、その手から不気味な紫の煌めきを解き放つ。

「おおっと！メイちゃん、やっぱオレの嫁だな。考えることが、本当に同じだぜ」

運転席のほうから智也が、オイルで黒ずんだ顔を覗かせた。このコンテナには覗き窓があり、運転席のほうと開閉する戸にそれがつけられている。

「な、なにをしたのっ!？」

深汐は紫色の光を目で追っていたが、智也の声に注意を引かれ、運転席のほうを見てしまった。

「余計な邪魔は入ってほしくない。ただそれだけのことさ」

不気味に笑っているメイエット。深汐がよそ見をしている隙に、彼女は拳銃を拾い上げようとしていた。

「させない！」

「な」

とつさにナイフを投げつけられて、メイエットは前転して拳銃から離れた。そのナイフは拳銃の脇に転がっている。

「やるな。バニライイス」

「そのあだ名、迷惑だから止めてちょうだい！」

「なんだと？」

深汐が絶叫した直後、深汐から紅のオーラが現れていた。それを

目の当たりにしたメイエツトは、あることを直感する。

(レフォレーゼと、同調しているだ……？ まだ本調子ではないようだが、こんなところで覚醒されたら……！)

すでに深汐の足下は、黒ずんでいた。それは紅のオーラが持つ、熱気によるものだ。

「ならば」

「えっ？ きゃあっ!？」

起死回生にとメイエツトは、腕時計からワイヤーを放った。しかしその先端は、深汐の足首には当たらずにコンテナの端に固定される。トラックが揺れたためだ。

「ちいつ！ 何をしている、智也！ 脇見運転しているからだぞ！」
「わりいわりい！」

憤るメイエツトだが、冷静に深汐の動きを観察している。

胸ポケットにあるレフォレーゼのカードを、深汐は奪われないように手で庇っていた。そのワイヤーが回収されないようにと、片足でそれを踏みつけている。

「や、やってみなさいよ！ レフォレーゼを、奪えるなら取ってみればいい！ そうしたらあたしは、絶対にあなたのことを許さないから……」

「ふっ。威勢だけはよろしいな」

急にトラックがブレーキをかけた。

「きゃっ」

「くっ」

深汐とメイエツトは予想外のことに、体勢を崩して手をついていた。

「智也っ！」

「メイちゃん。歌唱による氷河の魔法が、強すぎるぜ……」

運転席から聞こえる銃声と赤い光。背中から冷たい風が吹き抜けて、深汐は思わず後ろを振り返ってしまった。

「な、なにこれ……」

見渡す限り、白銀世界。大通りとその周りにある住宅地が、ひとつ残らず氷漬けにされている。唯一氷が張っていないのは、トラックが走行していたところのみ。また、追跡している一台の装甲車だけだった。

「あれは、わざと残した自衛隊の装甲車だな。好都合だ」

「わわっ!？」

よそ見していた深汐は、急に足を引つ張られる。メイエットが深汐の運動靴に、もう片方のワイヤーを撃ち込んでいたからだ。

「おとなしく凍りつけ」

耳元でメイエットの声がして、深汐はしまったと声を発する前に、彼女に胸を押されて氷漬けにされてしまった。

「ほらよつと」

氷像と化した深汐を渋い顔で踏みつけ、メイエットはやってきた装甲車に銃口を向けたままこう言い放つ。

「人質は返してやろう。お湯でもかければ、元には戻る」

「な、何を言っているんだ!？」

装甲車から降りてきた自衛官達は、頬を撫でる冷たい風を受けて身震いしていた。

「解っているだろう? あっしらと貴様らでは、力の差は歴然だ。

これ以上、抗うのはよせ。せつかく人質を返すと言っているのに、お前らがそれでは……だったら。お前らも氷漬けにして、一緒に踏み碎いてやろうか?」

犬歯を覗かせて笑うメイエットを前にして、自衛官達はたじろいでいた。

「ほら、受け取るがいい」

神妙な面持ちのメイエットは氷像の深汐を蹴飛ばして、彼女を自衛官達に受け止めさせた。

「さらばだ」

メイエットが手を振って合図すると、智也がトラックを急発進させる。トラックが十分な距離を取ってから、メイエットは追跡を遮断するために、氷結弾を道路へと撃ち込んだ。

同日。日が傾き始めた時刻。

「あつうつうつうつうつうつうつうつー！」

やかんやポットで沸かしたお湯をかけられて、氷像となっていた深汐は元に戻された。

「あ、ごめんごめん。ちょっと熱すぎたわね」

深汐の反応に驚いていた女性の看護師は、バスタオルを彼女にかけてあげる。

「あ、あれ……？ あたしって、確か……」

深汐は顔にかかったバスタオルで顔をふいてから、声をかけた女性の看護師のほうを見やった。

「あなたは、テロリストに利用されていたのよ。各局が緊急報道番組で、犯人の声明を発表してたわ。用がなくなったから、あなたを解放したって」

「え？」

深汐は思わず、両手で胸ポケットを押さえた。そこには熱湯で濡れた生徒手帳と、レフォレーゼのカードがあった。

「あ、あの。犯人は、何て言ってたんですか？」

「ここが病院の個室だと気づいた深汐は、つけられていたテレビを指差しながら看護師に訊ねる。

「ああ。確か、飼いや慣らしていたペットと、自分たちのテクノロジ―がどれだけ優れているのか解っただろう？ ってな感じだったかしら。あ、もう一度流されるみたいよ」

深汐の身体を熱くなったバスタオルでふきながら、看護師はテレビのほうを指差す。深汐は食い入るように、テレビ画面を見つめていた。

『あつしらの飼いやつらすペット……緋色の飛竜の力と、テクノロジ―がどれだけのものか解つたはずだ。物学と魔学を合わせた魔装銃の力は、お前たちでは太刀打ちできまい？ 逃走中でいくらか金を落としたが、まあ充分な量は確保できた。今回はこれぐらいで済ませておこう。では、さらばだ』

犯行声明を記録したテープ。その肉声を聞いて、深汐はメイエツトのものだと確信する。

「な、なんで……」

「助かってよかったじゃない」

メイエツトの声明は、明らかな虚偽だった。カード化したレフォレーゼは、深汐の胸ポケットにあるからだ。それに深汐は、コンテナ内には何も無いことを目撃している。

それでも、一部は覆しようのない事実だった。メイエツトと智也が使用していた魔装銃は、日米両国が総力を挙げても歯が立たないと証明されている。

『案ずるな。逃げ回るのは、あつしらだけで充分だ』

『この腕で抱き締めることが、本当の意味で守るということにはならない』

深汐はメイエツトの言葉を思い出した。メイエツトは、深汐が共犯だと思われないうちに芝居を打って出たのだと。レフォレーゼの存在はカードとなって隠されているし、日米両国に積極的に敵対していたのは、レフォレーゼを除けばメイエツトと智也だけだ。

「なんで、全部背負い込んで……？」

「えっ？ あ、凍つてるところがあるの？」

「あ、いえ……冷たいところは、もうないみた　くしゅん」

氷漬けにされていて、濡れた制服を着ているのもあってか、深汐は風邪を引いたらしい。

「あらら、お薬もあつたほうがよさそうね」

「あ、あはは……」

深汐は女性看護師の気遣いに、苦笑するしかなかった。

病院で処置されていた深汐は、氷漬けにされたことで風邪を引いた以外には無傷だった。母親の花梨かりんに車で迎えられて、深汐はその日に自宅に戻っている。彼女は家で風呂に入って温まり、それから着替えて、店舗兼住宅のリビングでくつろいでいた。

一階の通り道側にあるのがケーキを売る店舗で、その反対側半分が角沢家の住宅だった。二階には深汐と住み込みのバイトの部屋がある。

深汐はテレビで報道されている飛竜事件を振り返り、ある疑念をぬぐえずにいた。

「やっぱり、演技だよな」

『 だろっつな』

「わあっ!？」

精神にレフォレーゼの音が響き、深汐は混乱してコップに注がれたミルクをこぼしそうになる。

「何してるの〜? 深汐ちゃん」

一階のリビングでくつろいでいた深汐は、自身とテレビの間に花梨が割り込んできたことにも驚かされた。

その花梨の顔立ちは、目じりの垂れたほんわかで優しいような雰囲気がある。その髪は腰まであり、色素が薄いのか茶色っぽい。仕事の邪魔にならないよう、その髪はイチゴが飾られたゴムでポニーテールに束ねられていた。

「な、なんでもないつ! お母さんは、早くお店のほうに戻りなよ。お客さんが来てるじゃない」

心配そうに寄ってきた花梨を、深汐は店のほうへと突き返す。花梨は頬をふくらませて、思いきり不機嫌そうだ。

「あーん、彩ちゃん。深汐ちゃんがんばんこ〜きなだよ〜」

イチゴ柄のエプロンで涙をぬぐいながら、花梨は店舗のほうへと逃げ出した。

「深汐ちゃんはいろいろとあつて疲れてるんだから、休ませてあげましようよ。花梨さ〜ん」

涙目の花梨の世話をしているのは、この店舗で住み込みで働いている三時彩みときあやという少女。深汐と同じ年で、色素の薄い茶色の長髪を三つ編みにしているのが特徴的だ。花梨とは違い、彩はリング柄のエプロンを身につけている。

「あ、花梨さんの面倒は見てるから。ごゆっくり〜」
「う、うん」

深汐は彩の気遣いがうれしかった。彩が手を振っていたので深汐も手を振って、店で働くふたりを応援する。

「あら、彩ちゃ〜ん。書き入れ時じゃなくい。よおしっ。気合入れちやうわよ〜」

夕方ということもあり、客足が伸びていた。それに今更ながら気づいた花梨は、のんびり口調とは思えない速度で客の注文をさばいている。

「はあ」

深い溜息をついて、深汐はジーンズのポケットから一枚のカードを出した。レフォレーゼだ。

『そんなに慌てるな。ただの精神感応テレパスだろう』

「テレパス……？」

『なんだ。お前はそんなことも知らないのか』

目を細めて、知るはずがないと唇を尖らせる深汐。

「あらっ？ あ、あなたは……？」

「えっ？ な、何しに来たんですかっ!？」

ケーキを売っている店舗のほうで、動揺する花梨の声がした。それとは対照的に、彩は大声を上げている。

「よう。深汐」

そう呼ばれて深汐は寒気がした。

「め、メイエットっ!？」

深汐は飛び起きて、身構えながら店舗のほうを振り向いた。

「おや、元気そうで何よりだ」

「ちよつとあんたっ！ どうやって、あたしの家が……？」

「ふっ。寝ぼけているのか？ そんなカードを所持していて、あつしらが感づかないとでも思うのかしら？」

腕を組みながらメイエツトは、笑顔でショーケースに陳列されたケーキを眺めていた。

「うわあ。どれもおいしそう」

「で、電話しなくちゃ はうっ」

彩はどこかに電話をしようとしたが、花梨の手がそれを制止していた。

「いらつしやいませ。外で店内のお客さんがいなくなるのを待っていたようですが……何か、娘とお話があるんでしょう？」

にっこり微笑んだまま、花梨がメイエツトを深汐のいるリビングへと案内しようとする。メイエツトは花梨の瞳を見て、額に冷や汗をかかされていた。

「今日はいいさつだけよ。深汐からほのかに甘い香りがしたし、家がケーキ店だと言ってたしさ」

メイエツトは花梨に注文して、ケーキを大量に購入していた。彩は目を泳がせながら、花梨が取り出したケーキを白い箱に詰め込んでいく。

「あら、こんなにたくさん買ってもらえたのは久しぶりだわ」

手の平に頬を預けて、花梨はにんまり。その隣にいる彩は、花梨とメイエツトと深汐の三人を見比べて、どう対応したらいいのか解らずまごまごしている。

「おっと、深汐に鞆を返却しに来たんだ。ほら」

メイエツトはジーンズのポケットからカードを取り出し、光を発生させて深汐の鞆を具現化させた。それをカウンターに置いてから、財布を出して支払いを済ませている。

「ね、ねえっ！ どうして、テロリストの汚名を着てまで……あたしを、庇ったのよ？ あたしだって共犯じゃ」

その発言は、彩だけを驚愕させた。花梨のほうは手を出して、深汐にこれ以上は言わせまいと首を左右に振っている。

「まいどありがとうございま〜す」

「ええ。これからも、ここはひいきにさせてもらっわ」

メイエットは三人に深々とおじぎをした後、深汐にあることを問うた。

「深汐。今お前が持つレフォレーゼのカードは、あつしに預けるつもりはないのか？」

「な、何を言ってるのよ！？ あたしとレフォレーゼは、ずっと一緒だよ！ 誰の手にも預けたりしないんだから！」

「ふふつ。そうか。悪いことを聞いた」

肩をすくめた後、メイエットは深汐へとあるものを投じた。

「わつと。な、何よこれ……あの時の、ナイフじゃない」

鞘に収まったナイフを受け取り、深汐はメイエットの青い瞳をじつと見つめ返す。

「ミスリルナイフさ。それは深汐にくれてやったんだ。もう、あつしのものじゃない」

「で、でも……こんな危ないものを」

「ふつ。それは深汐の正義を象徴する刃にすればいいさ。万が一にも、お前の大切なものが狙われたら、それで抗って時間を稼げ。なかに、ここはケーキ屋だろう？ カットするためのナイフが美しくても、なんら問題はあるまい？」

口角を吊り上げて、メイエットは深汐を見つめながら微笑んでいる。

「そ、それもそうだけどさ。メイエット、本当にあなたは」

「案ずるな。深汐たちは普段通り、日常を生きればいい。あつしらは元々、お前たちの言う非日常に生きる者さ。だが、たまにはこうして甘いものぐらいい……つまんでもいいだろう？」

メイエットは購入したケーキが入っている白い箱から、シュークリームをひとつ取り出した。それを一口食べて、頬を朱に染めてい

る。

「やっぱり、ここは本物のパティシエが作ってるな。深汐からおいしいバニラの香りがしたから、どんな人が思ったら……うん。本当にいい腕をしている」

「あら、それはうれしいわ。最近、不景気なのに売れ行きがよくなかったもので。常連さんが増えて、ありがたいわね」

唇についた生クリームを指でぬぐい、それをなめてからメイエツトは高笑いする。

「あっははははっ！ これはいい。ユーモアもある人だとはな。まあ、皆に迷惑がかからないように……お忍びで来るよ」

メイエツトは白い箱片手に、三人に背を向けて店を出ようとした。「ちよつと、正面からじゃなくて裏口から来なさいよね。あたしらは普段、そっちから入ってるの」

深汐はサンダルを履いて店内に踏み込み、メイエツトを呼び止めた。それから親指で後ろを指し示して、ちらりと彩のほうを見やる。「そうか。次回はそちらからお邪魔しよう」

「ええ。あなたは、もう有名人なんだから。人目につかないように動きなさいよね」

「ああ。深汐、またな」

おたがいに手を振り合い、深汐とメイエツトは別れた。深汐はレフォーレーゼのカードを抱き締めて、メイエツトから授かったナイフ片手に微笑んでいる。

「またね、か。本当に、また会える日が来るんだろうね」

深汐はメイエツトの思いやりに触れて、自分がまだまだ弱いことを痛感していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4555w/>

ずっと一緒だよ

2011年9月8日03時25分発行